看護 36（14 ）131-135　　1984

臨床部門の教育

湯槙（ゆまき）ます

東京大学医学部に衛生看護学科ができたのは，昭和28年のことであった。当時は聖路加で教鞭をとっていたが，未知の世界に入っていこうとする自分に確信もなく，恐怖感もあった。しかし，結局のところ，学科はできてしまっており，学んでいる学生には気の毒であるし，伝統ある大学教育のなかで，看護の基礎教育が発足したのであれば，看護婦の１人として受けるべき責任があるのではないかと考えるようになった。大学として「看護学はこのようなものだ」と教えるのではなく，学生は何を聞きたがっているのか，学生の意欲にしたがって看護をともに考えていきたいと思っていた。その当時の看護婦は，あくまでも医師の診療の補助者であり，看護の独立した仕事があるなど考えられていない時代であった。戦後の学制制度の改革後の動揺のなかで，高度の技術教育は大学の使命であるといわれていたが，看護教育もより高いものにしなければという気運になっていた。

東大分院は，雑司ケ谷にあり，戦時中は医学専門学校があり，終戦後閉鎖されたことから，分院の存在価値が問題となり，医学部のなかに新学科を設置して，分院の教育的機能を生かしたいという意向であったと聞いている。衛生看護学科を設置するに当たって，反対をした先生方は多かったと聞いているが，結局，教授会をとおり，初代の学科主任教授には生理学の福田邦三先生が就任された。東大に衛生看護学科が設置されたことに対する社会の反応はさまざまであった。看護に対する認識を新たにし，これからの看護に期待をする者，看護婦の仕事に対する認識・見方が変わった者，高度の教育が必要であることの認識が高められたこと，などがあり，設置されたこと自体に大きい役割があったと考えられる。

しかし，一方では，看護婦自身の気持ちのなかには，自分たちはどうなるのか，という危惧があったことも事実である。できたとしても，何をする人なのか，どのような人が育てられるのか，何ができるのか，自分たちはどのように指導されるのか，おかしな指導をされては困る，といった声もあったようである。そこで，看護学科の第１回生が２年のとき，専門課程の準備段階で衛生看護学科とはどのような学科であるかを明らかにしておくために，福田先生とともに「衛生看護学科というもの」というパンフレットをつくった(次頁参照)。

アメリカのトロントで勉強したときの経験から，コロンビアやエールやカリフォルニアなどの大学で行なわれている，看護学校を卒業してから入る，いわゆる上級課程のことが頭にあったが，東京大学とアメリカの大学との間には大学という規準にずれがあることに気づいた。それはアメリカの大学がまだ社会に役に立つように応用力をつけることに主眼をおいていたのに反し，東大では基礎的な力をしっかりつけることが主眼であった。アメリカでは看護はともかく独立しており，患者を中心として，個人個人を楽にし，幸せにしていくためには看護はどのように考えられねばならないかが中心の課題とされていた。しかし，当時の日本の大学関係者のなかには，とくにワザわいならば大学教育で教えねばならないほどのことはないだろうという考え方も存在していた。

このような戸惑いの一時期が過ぎた後，私は周囲が助けてくれ，育ててくれるつもりならば，看護の学問をつくり出していくことができると思った。事実，

衛生看護学科というもの

東京大学で昭和28年に始めた衛生看護学科は4年制大学の2学科であります。世間では「大学で看護教育をする」ということを不審に思う人が多いでしょうが，実は「看護」という言葉の意味が，本学科と世間とではちがうのです。

言葉の説明

「看護」ということを，世間の大部分の人はしろうとにもできるような病人の「みとり」をすることだとか，病人の用事をする下女の役目をなすことだと思っているらしいのです。また今までの病院を知っている人は，看護婦は医師の手つだいをする補助員だと思っています。これは日本が，ナイチンゲール以来現在までの間の世界の看護サービスの発達について行くことができず，とり残されたことを意味するのです。そして今となってはヨーロッパ，アメリカのナース（nurse）を「看護婦」と訳し，かの女らがするナーシング（nursing）を「看護」と訳すことが大変な誤解を招くようなありさまになってしまったのです。

ナーシングは「はぐくむ愛の心ずくし」であります。自分の子供に対してでも，患者に対してでも，社会民衆に対してでも，学校において学童に対してでも，産業界の労働者に対してでも，すべて健康を回復し，確保し，増進するように世話をすることをナーシングというのです。衛生と言っても同じことです。乳幼児は育も妊産婦の健康指導も，学童の養護も，部落の健康管理も，事業場の衛生管理もみなナーシングです。病院では積極的に治療を企画するのは医師ですが，これに呼応して患者の一般的条件を整え，身体的にも，精神的にも，社会的にも，遺憾のないように，慈愛と思慮

緒方富雄先生は，冬のさなかに午後2時頃から夕食をとらずに9時頃まで衛生看護学科をつくった医学部の考えを聞きたいという質問をともに受けてくださった。また，できた以上はなんとかやっていこうという気構えを示してくださった勝沼晴雄先生，三浦義彰先生，紬川宏先生たちも看護の学問性を育てるにはどうしたらよいかを，それぞれのご専門の立場から真剣に考えてくださり，学生の教育に当たられた。看護の授業がはじまり，私のほかに公衆衛生院にいた故中道千鶴子さん，聖路加を出て司令部で通訳をしていた滝沢稔子さん，やがて聖路加を出て鹿児島大学の看護学校にいった今村（富内）節子さん，通訳をしていた故大塚寛子さんが加わった。それから間もなく，浦本秀子さん，木下（亀田）安子さんが加わった。その当時は，それぞれの分野で活躍して業績をあげている人々であったが，力不足で無理があり，教える内容にも誰も自信がなかった。看護に学問があるのかないのか，あるならば出してみようという

とをもって，患者の回復を促進するように措置をするのが臨床ナースの役目です。

本学科のねらい

近代社会の不可欠の要素として，このような保健活動をする婦人，すなわち欧米的な意味での有能なナースを看護婦，保健婦，養護教諭として日本にもほしいものです。それにはまずその指導者も養成したいのです。そして日本の民衆のために本格的なナーシングを広めようというのが本学科のねらいです。もちろんナーシングの理論や技術について，真理の解明や方法の改善は本学科の重要な研究課題であります。

近代的ナーシングをもって人々のあらゆる意味での健康を回復，保持，増進するように努めるためには，心に深い人間愛をたたえていなければならないことはもちろんですが，なおその上に患者の状態と医師の処置とを理解するに必要な医学知識，保健衛生学の専門的知識，心理学および社会学でとり扱う人間生活の充分の理解，および実施する看護技術の学問的は握と熟練とが必要であります。それで本学科では一般教養としての大学教育を正規の課程で授けた上に，8講座の陣容をもって科学的裏付のある本格的なナーシングの教育を実施し，右のような能力のある卒業者を世に送るように努めています。

卒業後の活動分野

このように看護，保健に関して指導的人物になるような者を養成するのが当学科の目的ですから，卒業後は看護婦，保健婦，衛生管理者あるいは教職員，技術者，研究者等の資格で種々な方面，たとえば医療（臨床看護），公衆衛生（都市衛生，農村衛生，母子衛生，精神衛生，学校衛生，社会福祉，人口問題，寄生虫補導，産業保健管理等）や健康教育（養護教諭，保健の中学校教諭および高等学校教諭）関係の諸方面に就職してもよく，研修を重ねた上で看護婦学校養成所の専任教員，ことに看護関係の短期大学の教

ことで，教官の悩みも深刻であった。しかし，学生の失望と悩みのほうがはるかに深刻であったと思われる。それよりも，東大全体が看護を理解できなかったというのが事実であった。

専門課程がはじまり，看護実習が行なわれることになったが，分院ではその準備がまったくなく，最初に赴任した今村（宮内）さん，大塚さんは，分院の地下のカビくさい，壊れかかった床の掃除からはじめることになった。戦後の労働にはなれていたこととはいえ，その労力は大変なものであった。当時は，予算節約のため用務員の数が少なかった。患者さんのために廊下の電灯をつけて明るくして歩くと，用務員が後で消して歩いたという話もある。実習場にはシーツをはじめもろもろの看護用品もなく，病室ではカーテンもなく，患者の清潔を保つことも和ぼつかない現状であった。しかし，これらの用品，備品，設備は，ロックフェラー財団の寄付によって補われた。やがて看護の教師陣が

授になることも待望されています。また日本を代表して看護の国際的会議等に出席し，外国の専門家と対等な討議に参加するような任務も将来当然この卒業者に期待されるところです。

たった一種の進路

衛生看護学科には右に述べたような，指導的なナースたるに必要な課程をもつ，ただ一種の進路しかありません。そして入学から卒業まで4年間直通しており，途中から他学部，他学科に転じる便宜はありません。

また他の看護婦学校養成所，保健婦学校養成所とはちがい，大学の1学部の1学科ですから，入学者選抜方法，授業料等も一般の東京大学入学者の場合と同じですが，入学者選定は当学科志望者だけの間で行います。なお学生に対する給費制度はありませんが，半数以上の学生に日本育英会奨学金が交付されています。

東京大学雑司谷寮は本学科学生のみを収容する学寮ですが，定員が25名しかないので，常に満員です。毎年卒業生が退寮したあとに，入寮希望の新入学生を選考の上，許可しています。

本学科は固有の建物を要求中ですが，現在は東京大学医学部附属病院分院の構内に位置しています。本学科学生はここで専門教育科目を学びますが，一般教育科目，外国科目，保健体育科目等は東京都目黒区駒場町 865 にある東京大学教養学部において学ぶのです。

大学に関する事務はこの教養学部でとり扱います。

東京都文京区雑司ヶ谷町 120
東京大学医学部附属看護学科

ふえ（大森文子，長谷川（安藤）小夜子，馬場（宮島）昌子，大倉（浅田）美智子，飯田（戸次）澄美子，金子光，林澄子，兼松百合子，都留伸子，久松一恵，上田礼子，前原澄子，中川（小島）由子）講座もできた。看護基礎医学，基礎看護学，公衆衛生看護学，臨床医学看護学の4つが難い，協力して教育が行なわれることになった。開設当時の看護以外の教官は，細川宏，阪田隆（解剖学），大沢正一（病理学），石河利寛，山川純（生理学），後藤正勝（細菌学），三浦義彰，東畑朝子（生化学），浦口健二（薬理学），塚原国雄，勝沼晴雄，田中恒男（公衆衛生），笠松章，上出弘之（精神衛生），林田健男，田中太平（外科），神山直一（整形外科），藤井良一（小児科），坂本秀夫，小林太刀夫（内科），森山豊（産婦人科），落合亨一郎（泌尿器科），斎藤正行（臨床検査科），角田義和（教養学部），中村芳生（事務係）の方々であった。

当時，ロックフェラー財団の東京駐在員であったミス・オルジンの援助を得て，ロックフェラー奨学金で若い教師が次々にアメリカに勉強にいった。

私は，基礎看護学講座の主任であったが，私としては，道のない山に登っていく思いであった。それにしても，看護には学問がないといって，失望し，不満を訴えていた学生の姿は忘れられない。事実，看護の理論を解説するスタッフは養成されてはいなかった。そのスタッフを養成するのがこの学科の存在価値でもあった。研究活動がはじまったのは，やはり卒業生が出てからであった。「患者の求めている看護」「患者は看護サービスをどう受け取っているか」等々を発表し，雑誌に投稿した。

看護の基礎理論を組み立てる試みとして文光堂から出版された『看護の基礎』は，当時の基礎看護学講座の一成果であった。看護の探究途上，私にとって最大の事件は，ヘンダーソンの『看護の基本となるもの』であった。

卒業生を社会に送るようになって，看護界の人々は，どのような仕事ができるのかを期待して見守っていた。今までの日本の看護教育のあり方とは，まったく違ったタイプの看護職を迎え，現場では戸惑いも多かったと聞いているが，しだいにその実力が発揮され，広い分野での看護の原動力となって動きはじめた。ふり返ってみて，当時の看護学をつくっていこうとする強いエネルギーがここまでひき続いてこられたのではないかと思われる。そして，大学教育のなかで，最も基本的に身についてきた態度として，自分で判断し，それを実践にし育っていこうとする力，そして，そのことに喜びを覚える人たちによって勇敢に新しい道が開かれ，ユニークな仕事が開拓されてきたのではないかと思われる。私は昭和40年3月，11年間の在職期間を経て停年で退職した。

（元東京大学医学部教授）